

HOUSE YK / ISLANDS

正会員 赤松佳珠子 君
正会員 佐藤 淳 君

いわゆる旗竿地だが、「旗」に比べて「竿」の分量が大きい敷地である。ここで旗ではなく間口 4m、奥行 40m の竿部分を居住空間として選んだことが、この住宅の性格を決定づけている。興味深いことに、この周辺では敷地境界に塀を設けず、互いの軒先を自由に往来するのが慣例であるという。それに倣い、「旗」にあたる庭部分は、そのまま隣地同士が敷地奥に残した「共有空地」に向かって開放されている。視察時には 2 人のお子さんが先に立って隣家の軒先を通り抜け、近隣との関係を物語ってくれた。元は港町であったという地域ならではの、鰻の寝床地割との共存方法であろう。

間口の狭い住宅が常に直面するように、この住宅でも短辺方向の耐力壁の配置が問題とされた。初期案では短い壁をランダムに配置するなど、試行錯誤があったという。しかしここでは、薄いラーメン構造を多数並べることにより、動線を阻害することなく連続した空間を生み出している。その一方で単一の構造システムに支配されている印象はなく、構造体の高さの違いや、相互のずれによる採光スリットが室内空間に変化を与えている。加えて「しま」と呼ばれるいくつかの什器が、長大なワンルーム空間に適度な滞留ポイントを与える。結果生まれたのが、一連の流動性・回遊性は備えたまま、低くプライベート性を感じる水回り、ブリッジによって上部空間が意識される吹き抜け、高く開放的なリビング、という多様性を持った住空間である。

この薄い構造体を実現しているのは、ツーバイ材を弱軸方向に使いながら、柱脚の剛接合と内外の構造用合板による合成効果によって面外剛性を増すという発想の転換である。加えて、異なるスパン・高さのラーメンを重ね合わせることにより、固有周期の違いが全体の揺れを低減しているとも考えられる。鋼板系構造に比べて明らかに断熱性能に優れている点などを考えると、住宅用の薄肉構造として広く適用しうるポテンシャルを持っているよう。

スリット部の外光や間接照明によって 62mm 厚の構造体は存在感を消し、拭き取り仕上げで残された構造用合板の木目が穏やかな素材感のみ伝えている。外部からは、仮に近隣住民となって敷地境界付近を通り抜けると、壁の重なりによって視線の抜けはない一方で、単なる照明による演出ではない暖かい生活感が伝わってくる。その意味で、この住宅が塀に囲まれていたり、外壁が完全に連続したものであったりしたら、住人・近隣両者にとってまったく意味の異なる建築となったはずだ。

既成ツーバイ材と金物で薄肉ラーメンを構成できること自体、狭小地住宅用の一般解として十分な可能性を持つが、さらにそのプロポーションを生かした繊細な詳細が、室内空間そして近隣との関係性に大きく寄与している点が高く評価できる。

よって、ここに日本建築学会作品選奨を贈るものである。